

『オーディンの島』に投影される現代デンマーク社会
ーデンマーク人のアイデンティティの揺らぎー

デンマーク語専攻 今石茉那

目次

1. はじめに
 2. 作品概要
 - 2.1. 作者紹介：ヤンネ・テラー
 - 2.2. 作品紹介：ODINS Ø 『オーディンの島』
 - 2.1.1. 物語の舞台
 - 2.1.2. あらすじ
 3. 主人公「オーディン」の役割
 4. 主人公「オーディン」を取り巻く人物の役割
 - 4.1. オーディンの支援者
 - 4.2. 国家権力者
 - 4.3. 狂信者とナショナリスト
 - 4.4. レンナルト・トシュテンソン
 5. 主人公「オーディン」を取り巻く社会
 - 5.1. グローバリゼーションと移民の増加
 - 5.2. 国家のアイデンティティの揺らぎ
 - 5.3. アイデンティティの揺らぎの反動
 6. 結論ーおわりにー
- 使用テキスト
参考文献
インターネット資料

要約

本論文はヤンネ・テラーの小説『オーディンの島』(1999)を分析し、作品に投影される現代デンマーク社会について考察したものである。『オーディンの島』は北欧神話の翻案と考えられるとともに、移民2世であり世界各地で働いた経験を持つ作者による、現代のデンマーク社会に対する風刺として読むことができる。本作では、オーディンが現代北欧に現れたことで、世界終焉の予言やナショナリズムが蔓延し、国家間の戦争が勃発しそうになるなど、北欧が混乱に巻き込まれていく。オーディンが現れた20世紀末のデンマークと思しき国は、移民やグローバリゼーションの影響で、多文化社会となったことで、国家のアイデンティティが揺らいでいる。本作はそうしたポストナショナリズム時代のデンマークを描き出しており、本稿ではテラーが提起したデンマーク社会の問題、そして作品の中でオーディンが現代の北欧に現れた意味を読み解いた。

第1章では、本論文で扱うテーマや構成について述べ、第2章では『オーディンの島』の作者ヤンネ・テラーについて紹介するとともに、本作の舞台やあらすじの説明を行った。第3章では、主人公オーディンの役割について考察した。隻眼で髭の老人であることや、死の神の性質などは北欧神話の主神と共通しているが、オーディンの容姿は身長120cmもなく、肌の色が浅黒いと書かれていて、いわゆる北欧人とは似つかない。さらに、身分を証明できない彼は、北欧の地で余所者として扱われる。彼の目的は一貫しているにもかかわらず、その立場は精神異常者、不法移民、救世主、政治的な重要参考人と変動していて、アイデンティティが不安定で不確実である。これはまさに現代デンマークの象徴で、オーディンは現代の問題を顕在化させる存在だと指摘した。第4章は、オーディンを取り巻く重要な人物たち、特にオーディンの支援者、国家権力者、狂信者とナショナリスト、そしてレンナルト・トシュテンソンに焦点を当て、それぞれの立場に分けて考察した。とりわけ、オーディンの支援者たちは皆、社会のはみ出し者という性質を抱えており、それゆえに“外”の視点から問題を冷静に見ることができたと指摘した。第5章では、オーディンを取り巻く北欧の社会について触れることで、現実のデンマーク社会における問題を明らかにした。本作でオーディンが不法移民ではないかという疑いをかけられたことから、デンマークの移民問題が浮き彫りとなる。デンマークには1960年代以降、大量の移民とともに異なる宗教や生活習慣が流入したが、それらの受容は難しく、デンマークがイスラム国家にされることを恐れる者が多かった。そのため、人々は移民に対して不寛容になり、政府は移民流入抑制などの強硬姿勢を取るようになった。そして、国家のアイデンティティの揺らぎの反動のように、燻った

移民への不満がイスラムに対して爆発し、大きな対立を生み出したと考えられるのが、ムハンマド危機である。『オーディンの島』はこれ以前に書かれたが、過熱したデモや宗教間の闘争、大使館の放火、それによる多数の死傷者など、多くの点でムハンマド危機を彷彿とさせる。そのため、ムハンマド危機に対するテラーの見解を紹介した。彼女は一連の衝突を、デンマークの無知と独善性が原因だとみなし、政府の無責任な対応を非難した。さらに、国際世界に参加することを望むのなら、他文化の尊重を学ぶことが必要だと彼女は述べている。最後の6章では結論をまとめた。オーディンという古代北欧のアイデンティティともいえる存在が、作中のポストナショナリズム時代の北欧では、余所者・はみ出し者として扱われている。それにより、テラーは現代デンマークの問題を露見させ、読者に客観的に社会の歪みを見つめさせることに成功した。さらに、状況に応じて変わるオーディンの外的なアイデンティティ同様、国家のアイデンティティも不安定で変化しつつある。以上に加え本作には物語全体に“伝える”という共通のテーマがある点についても指摘した。当初オーディンは悪い警告を伝えようとしており、その後彼が偶然降り立った島のたった二つしかない町の一つが、メッセージを運ぶことを生業とする郵便局町であった。また、オーディンの重要な支援者であるシグブリットは最後に、世間に真実を伝えるため、オーディンに起きたことを書き記し始める。一方、誤った情報や悪意を持って改変された情報を伝えれば、物事が悪い方向に進むことは、本作やムハンマド危機を見れば明らかである。そして、作者テラー自身も著作を通して社会問題に警鐘を鳴らし、真実を伝える役割を担っている。

『オーディンの島』は多くの点で北欧神話を彷彿とさせるが、描かれている対立もまた、北欧神話における対立構造と共通している。北欧神話では、神々と巨人間の最終戦争ラグナロクが起こり、世界は滅んでしまう。しかし、神々と巨人はしばしば親族関係を結ぶことから、全く別の種族だとは考えにくい。ラグナロクとはいわば内戦なのである。『オーディンの島』においては、デンマーク国内での争いや、デンマークと近い関係にあるスウェーデンとの戦争が暗喩されている。これは、近しい者同士で殺し合う北欧神話の残酷な運命の筋書きと同じだといえる。『オーディンの島』は、北欧神話をメタファーとして用いつつ、現代デンマーク社会の問題を浮かび上がらせている。これはテラーの独創的な着眼点であり、フィクションを通して真実を語る文学の豊かさが表れていると結論付けた。